

有坂秀世「上代に於ける特殊な假名づかひ」について

中村雅之

1. 安田尚道氏による有坂論文の発見と紹介

有坂秀世の未発表論文・書簡・講義録などを収めた有坂愛彦・慶谷壽信 1989 に、ただ一つ収録できなかった論文が「上代に於ける特殊な假名づかひ」(『國語知識』第 2 巻第 1 号、1937)であった。安田尚道 2007 は、稀観本となっていた『國語知識』を探し出し、有坂論文の紹介(翻刻を含む)と批評をおこなった。「上代に於ける特殊な假名づかひ」は、分量も比較的短く、デスマス体で書かれた「論文というより随想に近いもの」¹であるが、学説の紹介の仕方に独自の着眼点がかがわれ、興味深い文章になっている。

2. 安田氏の評価

安田 2007 における翻刻によれば、有坂秀世「上代に於ける特殊な假名づかひ」の小見出しと内容は以下の通りである。いま便宜上(a)~(d)に区分し、小見出しを<>で示す。

- (a)<萬葉假名の用法>---万葉仮名の説明。契沖と本居宣長に言及。
- (b)<特殊な遣ひわけを発見>---上代特殊仮名遣の説明。本居宣長と石塚龍麻呂の発見内容を紹介。
- (c)<奥村榮實と橘守部>---奥村榮実(てるざね)と橘守部(もりべ)の業績を紹介。
- (d)<橋本博士の発見>---橋本進吉の業績を紹介。

安田 2007 における議論の中心は、(c)に紹介された橘守部にある。それは、金田一春彦氏が、啓蒙的な文章にもかかわらず「上代仮名遣の存在に気付いていた学者としてもう一人橘守部の名をあげ」た点を評価しており(脚注1参照)、安田氏がその点に興味を抱いたからである。実際には、有坂論文では、「橘守部はさうした特殊な假名づかひなどに、興味もなく、又知りもしなかつたでせうが」と記されており、橘守部に関する金田一氏の記憶は不正確だったことになるのであるが、これは安田氏の指摘するように、有坂氏の記述が誤解を招きやすいものであったことが原因である(詳しくは後述)。結論として、安田 2007 は次のように述べる。

結局のところ、有坂の論文「上代に於ける特殊な假名づかひ」が上代特殊仮名遣研究史に新たに付け加えたものは何もなかった、と言わざるをえないのである。

¹ 有坂・慶谷 1989 に寄せた金田一春彦氏の「序」の言葉。氏は「上代に於ける特殊な假名づかひ」の内容を、記憶に頼って次のように述べている。

論文「上代に於ける特殊な假名遣」は、私が読んだ思い出では、論文というより随想に近いもので、向かいあってこたつに当たっている叔父さんから聞くお話のように、くだけた調子で書かれた文章だった。有坂さんもこういう文章も書かれるのかと親しみを感じたものである。そうした啓蒙的な内容の中にも、上代仮名遣の存在に気付いていた学者としてもう一人橘守部の名をあげ、その考えを紹介しているところがあって、こういう文章にも、そういう誰も言っていないことを書いておられることに敬服したものである。

3. 有坂論文の特徴

安田氏の「上代特殊仮名遣研究史に新たに付け加えたものは何もなかった」という評価には、苦心して探し当てた論文の中に期待した内容が書かれていなかったことへの無念さが含まれているかも知れないが、確かに、有坂論文を上代特殊仮名遣の研究史として読むならば、そのような評価にならざるを得ない。しかし、有坂氏が単に上代特殊仮名遣の研究史を述べようとしたのではない、という読み方も可能なのではないか。

有坂論文の小見出しを再び記すと、(a)〈萬葉假名の用法〉、(b)〈特殊な遣ひわけを發見〉、(c)〈奥村榮實と橘守部〉、(d)〈橋本博士の發見〉となっている。上代特殊仮名遣の研究史において重要な役割を果たした本居宣長と石塚龍麻呂の名は本文には記されているものの、小見出しには見えない。また、二人の後継者たる八木美穂と草鹿砥宣隆については、小見出しにはもちろんのこと、本文中にも全く言及されない。通常の研究史でないことは明らかである。小見出しに名の挙げられた奥村榮実・橘守部・橋本進吉の三人を顕彰することが、この有坂論文の主たる目的であったと考えられる。

有坂氏が何故にこの三人を評価したかと言えば、いずれも上代の文章における書き分けの中に音韻上の区別を認め、それを明言したからである。本居宣長や石塚龍麻呂は、後に上代特殊仮名遣と呼ばれることになる種々の書き分けに気づいたのであるが、それが音韻上の区別に基づくものとは明言しなかった。現在では、この二人も上代における音韻上の区別の可能性に言及した時期があることが知られているが、一貫してそうであったのではない。有坂氏の時代に二人を書き分けの發見者という位置づけに留めたのは当然であろう。仮に、二人が音韻上の区別かと疑ったことがあったとしても、その根拠を示さない限り思いつきに過ぎない。

奥村榮実は、「エ」に当たる仮名にア行とヤ行の区別があったことを動詞の活用や字音の差異によって論じた。有坂論文は次のように評価する。²

石塚龍麻呂の方は、その使ひ分けを広い範囲によりて調査したけれども、何故にかうした使ひ分けがあるかといふ考察には餘りふれて居りません。奥村榮實の方は發見した事實はエ文字一條ですが、この使い分けは明かに音韻上の區別から來て居るといふことを論斷したのは没すべからざる功績といはねばなりません。

一方、橘守部は有坂氏自らが「國學者中の變り種」と評する人物であるが、その方法も「面白いこと」とする。つまり、日本書紀の中に記された月の神様に次の三様の伝がある。

(イ)月弓尊(つくゆみのみこと)

(ロ)月夜見尊(つくよみのみこと)

(ハ)月讀尊(つくよみのみこと)

これについて橘守部は、同じツクヨミノミコトと読みそうに見える(ロ)と(ハ)とを別々に挙げているのは、讀(よみ)と夜見(よみ)とに音韻上の区別があったのではないかと疑っているという。以下が有坂氏の評価である。

これに就いては宣長も古事記傳の中に一寸疑ひをはさんで居りますが、然し深くその理

² 原文には漢字にフリガナが付されるが、割愛した。以下同。

由を考へて居りません。守部は一步をすゝめて音韻上の差違にあらざるかを指摘して居るのは偉いと思ひます。

以上のように、有坂論文で奥村栄実と橋守部が取り上げられているのは、古代の表記法の中に、論理的な根拠をもって音韻上の区別を明言した人として顕彰されていることは明らかである。橋本進吉についても、石塚龍麻呂の紹介者としてのみならず、上代の書き分けに音韻上の区別を認めた人として取り上げられている。

4. 橋守部の取り上げ方

有坂論文では、「守部は一步をすゝめて音韻上の差違にあらざるかを指摘して居るのは偉いと思ひます。」と述べたのであるが、そのすぐ後に「これは明かに奥山路のヨの兩類に當るわけで、音の異なる二つのヨがあつたと見るべきでせう。」と記している。この部分だけを見れば、あたかも橋守部がヨの甲乙二類の区別に気づいていたかのような印象を与えかねないが、もちろん有坂氏にその意図はない。

安田 2007 は、橋守部が「ツクヨミノミコト」について述べた部分が『稜威道別』巻第四に見えることを指摘する。そこでは「月夜見と、月讀とは、言は同じ事なれども、文字かはれば、音の上下異りし故なるべし。」³と記され、有坂氏が「音韻上の差違」と表現したのは正確には「音の上り下り」が異なるということになる。安田氏の指摘する通り、アクセントの違いを述べたものと解釈するのが穏当だろう。つまり、守部は二通りの「ツクヨミ」をアクセントの違いと見込んだのであるが、有坂氏はそれをより広く「音韻上の差違」と表現したのである。この措置は、説明不十分との誹りを受けかねないが、一方、有坂論文の主眼が表記法に違いの中に音韻の区別を見出した人を紹介するという点にある以上、「音韻上の差違」というくくりにはそれなりの一貫性があるとも言える。

古い日本語が現代の日本語と発音において異なる部分があること、あるいは古い日本語の表記法の違いが時に音韻上の違いの反映であること、そういう事に気づいた研究者たちを顕彰することが有坂論文の意図であったからこそ、通常は見過ごされそうな橋守部の指摘もすくい上げられたのである。有坂論文は次のように結ばれている。

そんなわけで、いろゝな人たちの苦心研究により、私共の知らなかつた上代に、後世とは違つた種々の音があつたことを知ることを得たのは愉快なことゝ云はなければなりません。

<参考論文>

有坂愛彦・慶谷壽信 1989『有坂秀世言語学国語学著述拾遺』、東京：三省堂。

安田尚道 2007「有坂秀世「上代に於ける特殊な假名づかひ」と橋守部『稜威道別』『訓点語と訓点資料』118.

³ 安田 2007 の引用による。安田氏は嘉永四(1851)年版『稜威道別』を利用している。有坂氏が見た可能性の高い大正 10 年の国書刊行会本によっても、この部分の字句は変わらない。ただし、大正版では句読点に「、」「。」を用い、また「月夜見と月讀とは、言は同じ事なれども文字かはれば、」として版本のように細かく区切っていない。なお、「音の上下」の部分には「上」と「下」にそれぞれ送りな「り」が付されている。